

Title	『社会主義』 『社会主義者』 なる用語の起源
Sub Title	
Author	平井, 新(Hirai, Arata)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.57(239)- 76(258)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『社會主義』『社會主義者』なる用語の起源

平 井 新

一

『社會主義』(Socialisme, Sozialismus, Socialism)『社會主義者』(Socialiste, Sozialist, Socialist)なる用語の起源並に傳播に關する問題は決して新しいものではない。此問題はこれまで既に Grünberg, Deville, Dolléans, Weil, Zévaos, Czóbal, Reybaud, Shadwell, Kirkup, Raillard 等の多數知名の社會主義史家に依りて多かれ少なかれ詳細に取扱はれてゐるが、是等諸家の所見は區々として一致せず、その決定には尙、今後の詮鑿追究に俟つ可きものが少くないのを想はせる。筆者は久しく此問題に興味を有するものであるが、今茲に前記諸家の所説を検討し、且つ綜合して、聊か今後の研究の資に供し度いと思ふ。

『社會主義』なる用語は何人によつて初めて使用せられたのであるか。Celestin Raillard は其著『Pierre

Leroux et ses oeuvres. Chateauroux, 1899”の中で、一七九九年秋ブリュッセル八月十八日のクレーターの前夜付 Mallet du Pan の書簡中に “On pourchasse les prêtres comme des malfaiteurs, et on tremble devant Babeuf et les complots du socialisme” といふ章句があると主張してゐる。假りに此主張が正鵠を得たものでありとすれば、この事に依て、嘗に、『社會主義』なる語が既に十八世紀末に形成せられた許りで無く、又その語が今日と殆ど全く同意味に用ひられた事が證明せられた譯である。然し、此主張は仔細に檢すると明に當を得て居ない。蓋し前記の章句は成程 François Descostes の編纂にかゝる Mallet du Pan の通信の中に見へては居るが、しかし、これは Mallet du Pan の筆に成るものではなく實は編纂者 Descostes 自身の書いたものである。Raillard の主張の誤れる事はこれによつて明白である。因り Descostes の “La révolution française vue de l'étranger (1789—1790). Mallet du Pan à Berne et à Londres, d'après une correspondance inédite. Touts” の出版は一八九七年の事である。『社會主義』『社會主義者』『社會化』なる用語の發祥地はフランケンでも無く、イギリスでもなく、實にイタリアであつて、それは一八〇三年の事である。即ち同年 Vicenza の一僧侶 Giacomo Giuliani の著 “L'antisocialismo confutato. Opera filosofica di Giacomo Giuliani, Conventuale Vicentino. Vicenza, 1803. Da Bartolomeo Paroni. Con R. permissione et privilegio” の中に見えて居る。而して此發見は前記 Carl Grinberg の周密不撓なる涉獵の賜物である。

Guiliani は本書の中で主として Raynal, Rousseau に關説して、十八世紀の個人主義理論を痛撃したのであつた。彼に據れば幸福なる『自然状態』と譎詐又は權力によつて創造された『文明状態』とを對立せしむる事は、それより生ずる政治的結果と經濟的結果を對立せしむる事と同様に誤れるものである。人間は生來政治的動物である。従つて、文明は私有財産によつて初めて、始つたものでも無く又、私有財産と共に始まつたものでもない。生活條件の不平等並に私有財産、現存の全秩序、即ち社會的階級政治は人間の肉體的、精神的、道德的不平等並に此相異なる天性の活動の不可避的にして且つ自明の結果に外ならぬ。Guiliani は自然によつて意慾せられ、かくて歴史的に傳承せられた社會的、經濟的、法律的秩序を『社會主義』“Socialismo”となし、これに個人主義を『非社會主義』“antisocialismo”として對立せしめ、この『非社會主義的哲學者』“socialista filosofo”の代表者としてルッソーを擧げ、その目的を以て現状の顛覆に在ると述べてゐる。茲に Guiliani の造出した Socialismo, socialista socializzare 等の新語が今月の意味と全く異なる意味に用ひられてゐるといふ事は言ふ迄も無い。彼は常に是等の語を個人主義の反對物の意味に用ひたのである。尤も個人主義なる語その者も尙未だ彼の知らざる所であつた。

(1) Celestin Bailhard; Pierre Leroux et ses Oeuvres. Chateauroux 1899. P. 91.

(2) Carl Grünberg; Der Ursprung der Worte “Sozialist.” Archiv für die Geschichte des Sozialismus and der Arbeiterbe-

『社會主義』『社會主義者』なる用語の起源(平井)

wegung 2. Bd. S. 373—374.

(二)

これより約三十年を経て、即ち一八三二年十一月十二日、『社會主義』なる語は其經營者 Dehaute の署名ある巴里の宗教的、政治的、哲學的、文學的週刊雜誌 “Le Semeur” に掲載せられた匿名の一論文 “Catholicisme et Protestantisme”⁽¹⁾ の中に現はれた。本論文の筆者は Alexandre Vinet であると記されつゝある。而して此考證は全く Gabriel Deville に負ふものである⁽²⁾。

Alexandre Vinet はフランスの亡命者から出た瑞西の牧師であつて、一七九七年六月十七日、Ouchy に生れ、一八四七年五月四日 Clarens に死んだ。著書に Du socialisme considéré dans son principe, 1846. Essai sur la manifestation des convictions religieuses 等がある。彼は “Semeur” 誌上の前記論文 “Catholicisme et Protestantisme” の中で次の如く言つてゐる。

“Le protestantisme, c'est l'individualisme dans la pensée. Le protestantisme, c'est une forme de la liberté. Or, la liberté n'étant qu'un moyen, comme on l'a fort bien dit dans ce journal, le protestantisme non plus n'est qu'un moyen. On ne se sépare pas pour se séparer, but contradictoire à toutes les indications naturelles et aux intentions visibles de la Providence. On se sépare pour se réunir; l'individ-

nalisme doit ramener au socialisme ; le protestantisme au vrai catholicisme ; la liberté à l'unité.

右引用中に見るが如く Vinet の當面の問題は經濟的、社會的問題ではなく、宗教的問題即ち加特力教と新教との關係である。彼は教會の分裂に反對して、その普遍性を主張するものである。彼の茲に意味する「社會主義」とは分裂せざる普遍的教會の意味に於ける加特力教と同一物で、固より今日の意味に於ける「社會主義」とは縁遠きものである。

これより約四ヶ月を経て、サン・シモン主義の機關紙「Globe」の一八三二年二月十三日號に J. J. Foncières の署名ある Victor Hugo ; Feuilles d'Automne 批評の一文が掲載せられたが、この論文の中に「社會主義」なる語が使用せられてゐる。筆者 Foncières はユーゴーの詩がその純乎たる個人的性質を有するに不拘、稱讚に價するものなることを言明した後、次の如く言つてゐる。

“ Nous ne voulons pas sacrifier la personnalité au socialisme, pas plus que ce dernier à la personnalité.”

此章句を詮索、指摘したのは“L'École saint-simonienne. Paris, 1896.”を初め多數の社會思想研究並に著作で有名なる Georges Weill である。彼は前記“L'École saint-simonienne”の附録“Notes sur le mot Socialisme”の中で『社會主義なる語が何時而も何人によつて始めてフランスで用ひられたかは尙精確に分つてゐない。“Globe”は絶へず、“social”と言ふ形容詞を使つてゐたが、誤り無ければ、余が

「社會主義」なる語を見出したのは唯一度だけであつた。それは「Feuilles d'Antoine」に關する一八三二年二月十三日の一論文に於いてである^(?)と述べて、吾人が曩に引用した章句を指摘し、その章句中では「personalité」及「Socialisme」の兩語がイタリックで書かれて、恰も新奇の造語であるかの如き印象を與へてゐるが、これは別段に意味はない。總てサン・シモン主義者は教父アンファンタンの例に倣ひ、頭字若くはイタリックを濫用したからである。兎まれ、此章句に於ける「社會主義」なる語は今日に於けるが如き意味をもつてゐないと述べてゐる⁽⁸⁾。

Jouffrès が使用した「Personalité」なる語は個人主義といふ程の意味換言すれば獨立、自主的にして他人と有機的に結合せざる人格の意に用ひられ、「socialisme」は人間の有機的關係を意味するものである。従つて茲に用ひられた「socialisme」の語が今日とは違つた意味に用ひられてゐるといふことは Weill が指摘する通り明かである。Giuliani に遅るる事廿九年、Vinet に遅るる事約四ヶ月である。

屢々「社會主義」なる名辭の創始者として擬せらるるものに Pierre Leroux ⁽⁹⁾ がある。彼は、一八二四年九月雜誌「Globe」を創刊し、一八三二年十一月サン・シモン主義と絶縁するに至る迄同誌編輯の任に當つて居た。Leroux は一八五七年出版の「Grève de Samarez」の中で、自分が「社會主義」なる用語の最初の使用者なりと揚言して、次の如く言つて居る。

“C'est moi aussi qui, le premier, me suis servi du mot de socialisme. C'est du néologisme alors,

un néologisme nécessaire. Je forgeai ce mot par opposition à individualisme, qui commençait à avoir cours. Il y a de cela environ vingt-cinq ans.”⁽²⁾

Leroux を以て此用語の創始者と看做す學者は殆んど孰れも、常にこの Leroux の回想を信頼して、無批判的に己れが研究の不動の典據となせるものの如くである。しかし『自ら「社會主義」なる語の最初の使用者なり』とする彼の主張の全く當を得て居ない事は、既に述べた如く Giuliani, Vinet, Jancières 等による先唱の事實ある事に徴して毫末の疑ひない所である。然らば更に彼の言ふが如く、此時（一八五七年）より廿五年以前即ち一八三二年には果して、彼は「社會主義」なる語を用ひた事があるであらうか。

一八五〇年 Leroux の著作集が出版された。その第一卷八九頁以下には政治論文を収録し、九〇頁の註釋には、是等の論文は一八三二年八月 “Revue Encyclopédique” に發表された旨が記されてゐる。そして本卷の一二一頁即ち第二編第八章には「社會主義」の文字が見へてゐる。ところが前記 “Revue Encyclopédique” の一八三二年八月號に Leroux は “De la philosophie et du christianisme” と題する論文を寄稿してゐるが、それを仔細に檢するに、その中には「社會主義」なる語は、彼の所言に反して、那邊にも發見されない。一八三二年に使用したといふ Leroux 自身の言は慥かに *Lapsus memoriae* であると言ふ外はない。事實はこれより二年後即ち一八三四年半頃、同誌第六十卷に掲載された “Philo-

sophie sociale.”なる論文の中に初めて、「社會主義」なる語を見出す事が出来る。そこには左の如き章句がある。

“Nous sommes partout aujourd’hui la proie de ces deux systemes exclusifs de l’individualisme et du socialisme, repoussés que nous sommes de la liberté par celui qui prétend la faire régner, et de l’association par celui qui la préche.”⁽²¹⁾

注目すべき事は茲で初めて、「社會主義」なる語が現行の技術的意味に用ひられて居る事である。此事實は慥に留意に價する。

彼は更に同論文中で屢々「社會主義」なる語を反覆し、自らその反對者なる事を明言して謂ふ、

“Nous ne sommes, je le répète, ni individualistes, ni socialistes.”⁽²²⁾

茲に又彼は「社會主義者」なる語を使用してゐるが、以下述べるが如く、この語に就ても、決して彼はその創始者ではない。前述せし所によつて、自ら「社會主義」なる名辭の最初の使用者なりと自任する Leroux の主張は言ふに不及又一八三二年に此語を使用したと言ふ彼の言明も共に全く根據なきものと言はなければならぬ。唯、一事の留意すべき事は「社會主義」なる語が彼によつて初めて現今の意味に使用せられた事である。「社會主義」なる語を最初に使用する事とこれを初めて現代的意味に使用する事とは固より別問題である。

- (1) Grünberg の『用語』は Catholicisme et socialisme など及びその後には Papeus calami などあり。
- (2) Gabriel Deville; L'Origine des mots socialisme et socialiste. Revue de la révolution française. Mai 1908 (Zévaès; Le Socialisme en 1912, p. 74—88 に轉載せらる。以下本書より引用)
- (3) Deville; op. cit., p. 80
- (4) Grünberg, op. cit., S. 374. 375.
- (5) “Globe” は一八二四年 Pierre Leroux が Dubois と共に創刊したもので、爾來一八三〇年十一月上旬迄は自由主義の機關紙として活動したが Pierre Leroux が次第にサン・シモン主義に傾倒するや、Dubois と分袂した。かくて同紙も亦一八三〇年十二月以來サン・シモン派の機關紙となつたのである。
- (6) Georges Weill; L'École saint-Simonienne. Paris, 1896. p. 309.
- (7) Weill; op. cit., p. 309.
- (8) Weill; op. cit. p. 309.
- (9) Leroux をフランスに於ける「社會主義」なる語の先唱者であるとする學者の一人は L'Idée de l'état の著者 Henry Michel である。彼は一八三四年 Revue encyclopédique に掲載された Leroux の小論 “De l'individualisme et du Socialisme” に用ひられてゐる「社會主義」なる語を以てフランスに於ける其用語の嚆矢であると言ひつゝる。(Michel; L'idée de l'état. Paris 1896. p. 225) 固より當を得てゐない。
- (10) Deville; op. cit., p. 77.
- (11) Deville; op. cit., p. 78.
- (12) Deville; op. cit., p. 78.

(三)

次に「社會主義者」なる語は如何なる歴史を有するか。何人が最初にこれを使用したか。前記 *Griffith* の場合を除き、此語は先づ英國で用ひられた。即ち一八二七年十一月オーエン派の機關紙「*The co-operative magazine and monthly herald*」の中に「共產主義者」なる語と共に見へてゐる。即ち左の如き章句がある。

“The chief question……between the modern (or Mill and Malthus) Political Economists and the Communists, or Socialists.”

此章句の發見者は“*Bakunin. Eine Biographie. 3 Bde. London 1898—1900*”を初めとし多數の無政府主義研究著作を以て令名ある *Max Nettlau* である。茲では「社會主義者」と「共產主義者」とが同義語として用ひられて居る。當時英國では、「社會主義」とはオーエン主義を指し「社會主義者」とは從つてオーエン主義者を意味するものであつた。寔に一八二七年は英國の土壤で「社會主義者」なる語が使用された最初の年である。併しこれと共に此語は決して英國で直ちに流布したのではない。蓋し、尙一八三二年中頃迄は、オーエン主義者は一般に“*rationalist*”, “*co-operator*”, “*social-reformer*”, “*principles of Owen*”, “*Owenians*”, “*Owenites*”等と呼ばれてゐたからである。而して「社會主義者」なる

語は一八三三年八月末頃に至つて漸く再び、“Poor Man's Guardian”に姿を現はし、一八三五年以來は他の雑誌にも用ひられ、かくして普及し、遂に海峽を渉るに至つたものである。⁽¹⁾

フランスで初めて「社會主義者」なる語を使用せし人物は世人の屢々信するが如く前記 Pierre Leroux でも無く又 Etudes sur les réformateurs ou socialistes modernes. の著者 Louis Reybaud でも無く。それは始めサン・シモン主義者であつたが、後にフーリエ主義に改宗した“Charles Fourier, sa vie et sa théorie”の著者 Charles Pellarin である。彼はフーリエの機關紙“La réforme industrielle ou le phalanstère”の一八三三年四月十二日第十五號に寄稿した一文“Presse départementale”の中で此語を使用してゐる。而して此事實を探索したのは前記 Gabriel Daville である。今少し其前後を引用すれば次の如くである。

“Quelle que soit, au resta, l'opinion particulière d'un journal sur l'assemblée nantaise, nous pensons, nous, avec l'Ami de la Charte, le Blaisois et la plupart des organes de la publicité dans l'Ouest, que les socialistes et industrialistes proprement dits y seront en majorité. Ceux-ci, et les derniers, seuls à bien dire, ont quelque chose d'immédiatement praticable, d'immédiatement utile à proposer. C'est en tout cas et de toute manière par l'industrie qu'il faut commencer la réforme.”⁽²⁾

Pellarin はこの語を、フーリエ主義者に對し、サン・シモン主義者即ち産業主義者を指示せんがため

に使用したのである。これに就て Grunberg は次の如き推定を下してゐる。曰く、此語は併し、相手側の採用する所とはならなかつた。この事丈けでも既に、この語がフランスの土壤では全く新奇のものであつた事を示すものである。 Pellarin 自身にとつても此語は全く偶然に而も無意識にその筆に上つたのである。尤もかゝる新語を造出することは當時のフリーエ主義者に取ては敢て異とするに足りない事であつた。それには二個の理由がある。その一はフリーエ主義者は現行私有制秩序を “état social” と呼び將來の社會秩序をば “état sociétaire” と稱するのが常であつた。次に保證時代と調和時代との過渡的段階を特徴づけるためにフリーエ自身が造出した “Socialisme” なる語は彼等フリーエ主義者の耳朶に慣れ過ぎてゐたので、此語と語呂の似通つた「社會主義」なる語が彼等の腦裡に浮んだのであらうと。 Grunberg の考證は興味深い、傾聽すべき推定であるが、それが果して事實の真相を穿つたものであるかどうか尙論議の餘地があると思ふ。

上述せし所を要約すれば次の如くである。「社會主義」「社會主義者」なる語は一八〇三年イタリヤで初めて Giacomo Guilanini によつて使用された。これとは全く獨立に「社會主義者」なる語は一八二七年十一月イギリスでオーエン主義の機關紙 “The Co-operative Magazine and Monthly Herald” に初めて現はれた。「社會主義」なる語も前記 Guilanini と全く獨立に、一八三二年十一月雜誌 “Le Renouveau”

の中に Alexandre Vinet によつて用ひられた。「社會主義」なる語がイギリスに於て初めて用ひられたのは、初め H. Hetherington が創し、Bronfere O'Brien が繼承編輯した雑誌「Poor Man's Guardian」一八三三年八月廿四日號に掲載せられた。「A socialist」と署名された一論文に於てである。その語は次いで「New Moral World」に現はれた。一八三六年以來オーエンの徒は一般に「社會主義者」の名の下に知られてゐた。イギリスでは、此の生れた許りの「社會主義」なる語はオーエン主義の意味に用ひられた。社會主義とオーエン主義とは密接に混同されてゐた。

「社會主義」なる語を英國人がフランスから借來つたかどうか論證出來ない。Dolleans に據れば英國の「社會主義」と佛國の「社會主義」とのこの兩語の間に關聯があるとは思はれない。この語は英國、佛國夫々別々に造出されたものである。そして、英國では「社會主義」なる語はオーエンの所謂「social system」から生れたものであると言つてゐる。問題の存する點である。

他方 Pellarin が「社會主義者」なる語を英國から借用したか怎うかも論證できない。しかし一八二〇年並一八三〇年代と言へば英佛兩國の間に社會主義思想の密接なる連絡及活潑なる交換の行はれた事に徴すれば、英國側が「社會主義」なる語を佛國から借用し、佛國側が英國から「社會主義者」なる語を借用することが有り得べからざる事實とは思はれない。現に Reybaud は「社會主義者」なる語をオーエン主義者から借用したと自ら言明して居るし、又彼はその著「Études sur les réformateurs ou socialistes

modernes”によつて此語を大陸に普及したと言へやう。⁽⁶⁾「社會主義」「社會主義者」なる二語は一八七八年以來フランス翰林院編纂の字典に正式に登載されるに至つた。

- (1) Grünberg; op. cit., S. 377—378.
- (2) Deville; op. cit., p. 81—82.
- (3) Grünberg; op. cit., S. 377.
- (4) Grünberg; op. cit., S. 378.
- (5) Édouard Dolléans; Robert Owen (1771—1858) Paris 1907. p. 310.
- (6) Grünberg; op. cit., S. 379.

(四)

是等の語は獨逸では何時頃より用ひられたか。

「社會主義」なる語は獨逸では一八四二年 Lorenz von Stein; Der Socialismus und Communismus der heutigen Frankreichs, Leipzig. によつて初めて用ひられた。又同年 Rottack-Welcker の Staatslexikon に Rutenberg が書いた “Radikal, Radikalismus” なる一頁に現はれてゐる。それには左の如き章句がある。

“Das religiöse Moment arbeitet sich unter der verschiedensten Form immer wieder hervor, sollte es sich auch nur in einer bestimmten Theorie des Sozialismus erkennen lassen.”

Rutenberg はこの特定の社會主義理論中に Owen, Fourier, Lamennais を加へた。

獨逸に於て「社會主義者」なる語は「社會主義」なる語に先立つ事二年即ち一八四〇年に殆んど同時に三人の思想家によつて夫々別々に使用せられてゐる。Rutenberg によれば其一人は Roeban (A. L. Churoe の雅名)である。Roeban は其著 “Kritische Darstellung der Sozialtheorie Fouriers” の中でノーリヤ理論に特有なる言葉 “sociétaire” の譯語として “socialist” なる新獨逸語を造出した。これと同時に他の二方面から此語が用ひられた。其の一は當時自由主義評論家の機關紙 “Deutsche Vierteljahrschrift” の一八四〇年第三卷に掲載せられた匿名の一論文 “Die Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft der politischen Ökonomie” の中に現はれてゐる。それには左の一節がある。

“Der Sturm der indisciplinierten Horden von St-Simon, Fourier und Owen habe ihr nicht anhaben können……Das gänzliche Misslingen der verschiedenen sozialistischen Angriffe rührt……nicht sowohl von der Unüberwindlichkeit der Lehre A. Smiths, als teils von mannfachen unverdaulichen Rohheit der neuen Sätze, teils von der unsittlichen und atheistischen Beimischung.”⁽⁸¹⁾

匿名筆者は “sozialistischen” なる語を Owen, St-Simon, Fourier を指示するために用ひたのである。此匿名筆者が何人であるかは不明であるが、恐らく Rottack-Welcher Staatslexikon の寄稿者たる Mohl, Bülow 或は前記雑誌の寄書家 D. Schultz の何れであらうと Ozóbel は推定してゐる。⁽⁸²⁾

同年同月に“Socialist”なる文字を使用してゐるの故 Adolphe Blanqui; Histoire de l'économie politique en Europe. Paris, 1837 の訳註兼 Fr. J. Buss による。Buss は同年十月、同書の見解註の序文中に“Socialist”を使用してゐる。左に序文の一節を掲げる。

“Die französische, ökonomische Schule hat den genommenen Anlauf zur sozialistischen Theorie fortgesetzt, ist aber, dabei freilich auch ins Uebere, Gehalt- und Grenzenlosen hinausgefallen. . . . Mag auch das Verkehrten bei den Owenismus, St-Simonismus und Fourierismus noch so vieles geboten werden, im Hintergrund ruhen ein freches Bedürfnis und ein guter Stock gesunden Guts. . . . Lassen wir diesen sozialistischen Schulen ihre Schatten und Dichtung im constitutiven Theil: ihren kritischen Theil nehmen wir an.”^(*)

Buss も亦サン・シモン、フーリエ、オーエンの教義を指して“sozialistisch”なる語を使ったのである。

(一) Ernst Czöbel—Zur Vorbereitung der Worte “Socialist” und “Socialismus” in Deutschland und in Ungarn. Archiv für die Geschichte des Socialismus und der Arbeiterbewegung. 3. Bd. 1913. S. 484.

(二) Czöbel; op. cit., S. 481—482.

(三) Czöbel; op. cit., S. 481.

(四) Czöbel; op. cit., S. 483.

“Socialiser”「社會化する」といふ動詞は前記 Giuliani によつて一八〇三年用ひられたが、フランスでは一八三二年六月廿九日前記サン・シモン派の機關紙“Globe”の中に見へてゐる。

“Alors que fut faite la première proposition d'abolir l'héritage des fonctions publiques, sans doute durent s'élever des réclamations analogues à celles que l'on nous fait quand nous parlons de désinfecter graduellement et pacifiquement la propriété pour la rendre publique, pour la socialiser.”⁽¹⁾

次いで此語は一八三二年十二月三日 Buchez の Journal des Sciences morales et politiques 第一號に、一八三二年四月 Revue européenne に、一八三二年九月七日ノーリエの機關紙“Le Phalanstère”に、更に一八三三年十月廿六日“Le Constitutionnel”に現はれてゐる。

“Socialisation”「社會化」なる名詞は一八三二年十月七日前記“Globe”に先づ用ひられてゐる。……“travailleurs qui, par le fait de la socialisation de leurs travaux, se trouveraient élevés au rang de fonctionnaires publiques.”⁽²⁾

次いで此語は一八三三年三月十八日“La Gazette de France”に、一八三三年十一月廿六日“Le Constitutionnel”に、一八三三年八月九日“Le Phalanstère”に現はれ更に一八三三年三月廿五日 Jules

Lechevalier の *Cinq Leçons sur l'art d'associer* の初號で此語を使用してゐる。⁽²⁾

“Collectivisme” 「集産主義」なる語は François de Corcelle の Documents pour servir à l'histoire des conspirations et des sectes 1831. に據れば、一八二〇年若くは廿一年に Dr. L.-V.-F. Arnard によつて造語されたものであつて、爾來先づ一八三二年末 Alphonse de Syon によつて “Quinze septembre 1831” の中に、次いで前記 Jules Lechevalier の *Cinq Leçons* の中に、一八三二年二月十七日 *Gazette de France* に、一八三二年三月一日 “Globe” に、一八三二年七月 “Revue encyclopédique” に、更に一八三二年出版の Buchez 著作 *Introduction à la science de l'histoire* に使用せられた。従つて Alexandre Zévères が此語を一八四三年白耳義の社會主義哲學者 Collins によつて、其著「社會科學」の中に初めて用ひられたと言つてゐるのは全く誤解に基くものである。此語は後年一八六八年マルクス共産主義排撃のためその敵手バクレーニンに依て用ひられ、更に一八七六年以來 Jules Guesde によつてフランスに普及せらるゝに至つたのである。(完)

(1) Deville; op. cit., p. 85.

(2) Deville; op. cit., p. 85.

(3) Deville; op. cit., p. 85—86.

- 1) Daville, Gabriel; L'Origine des mots socialisme et socialistes. Revue de la révolution française
Mai 1908.
- 2) Grünberg, earl; Der Ursprung der Worte "Sozialismus" und "Socialist". Archiv für die
Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung. 2. Bd. 1912.
- 3) Grünberg, C; Der Ursprung der Worte "Sozialismus" und "Socialist". Zeitschrift für Sozial-
wissenschaft. 1906.
- 4) Grünberg; L'Origine des mots "socialisme" et "socialist". Revue d'histoire des doctrines écono-
miques et sociales. 1909.
- 5) Grünberg; Artikel "Sozialismus u. Kommunismus. Elster's Wörterbuch der Volkswirtschaftslehre.
- 6) Reybaud, Louis; Études sur les réformateurs ou socialistes modernes. 1840.
- 7) Dolleaus, Édouard; Robert Owen 1907. éd. revue et augmentée.
- 8) Czóbel, E; Zur Verbreitung der Worte "Socialist" und "Sozialismus" in Deutschland und in
Ungarn. Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung. 3. Bd.

- 9) Raillard, Celestin ; Pierre Leroux et ses oeuvres, Chateauroux, 1899.
- 10) Weill, Georges ; L'École Saint-Simoniennne, son histoire, son influence jusqu'à nos jours Paris, 1896.
- 11) Michel, Henry ; L'idée de l'état. Paris, 1896.
- 12) Shadwell, A ; The Socialist Movement. 1925.